

あなたらしく

高崎市立高松中学校

三年 岡田 希

私たちは、日常的に「個性を大切に」や「多様性の尊重」という言葉を口にする。一方で、「他者と同じでありなさい」という考えも、まだ、根強く残っている。

私はそれが矛盾していると思う。「みんなの意見に合わせなきゃ」「みんなが好きだからそうしないと」こうやって無理に、周りと意見を合わせる人は少なくないだろう。もちろん、周りの意見に合わせなければいけない時もある。意見だけではない。好きなことや趣味、服装などをどんどん周りに合わせてしまった時、私たちは自らの手で大事にすべき個性をつぶしてしまっているのではないだろうか。

私がこう思ったきっかけは、小学生の頃、年の離れた兄の車で、スピーカーから流れていたHIPHOP

との出会いだった。それまで流行りのポップスしか知らなかった私にとって、重低音が響くビートと、飾らない剥き出しの言葉が飛び込んでくる。そんな世界は見たことがなかった。このころから、自分は他者や周囲の空気に合わせることに嫌悪感を抱いていた。話し合いの場や教室の中で、みんなが顔をうかがいあっている間、兄の車で聞いたラッパーたちは、誰一人として誰かの真似事なんてしていなかった。自分の弱さも、生い立ちも、そして自分だけの誇りも、全てを曝け出し、ありのままの言葉で歌っていた。「お前はどんなんだ？」問いかけられているような気がした。周りに合わせて自分の個性を隠すことが良いとされがちな日常の中で、HIPHOPだけは「お前はお前のままでいろ」と背中を押してくれているようだった。

母親がフィリピン人ということもあり、私は数か月間、フィリピンに住む機会があった。にわたりの鳴き声で始まる朝や、未知の食文化など、初めての土地で触れた光景は今も忘れない。何より最大の気づきは、現地の誰もが自分らしさを隠さずに生きていたことだ。

そして、新しい環境に戸惑い怖がっている私を、年齢や人種の壁を越えて温かく受け入れてくれる寛容さがあった。この数か月の海外生活で得た経験が、私の人生にとってかけがえのない財産だと思っている。

海外の多くのコミュニティでは、年齢や性別、あるいは生まれ育った環境なんて関係ない。一人の人間として、自分の意見や独自の考えを堂々と社会に伝える環境が当たり前に存在している。そして何より、そうして表現された「ありのままの自分」を周囲がリスペクトを持って受け入れる文化が根付いているのだ。そこでは、違っていることこそが、その人の「個性」であり「価値」になる。

しかし、私たちが生きるこの日本はどうだろう。海外と違って「ありのままの自分」を表現しようものなら、待っているのは建設的な議論ではなく、周囲からの冷笑だ。「あいつ、必死になっちゃってどうしたの?」「空気の読めない痛い奴」そんな風に、真剣に自分を生きようとする人を冷たい目で見つめ、あざ笑うことで、自分の平穏を守ろうとする風潮が私たちの周りに

は根深くある。個性を出せば叩かれ、個性を隠せば「個性を大切に」と言われる。この矛盾に満ちた息苦しい環境こそが、私たちの心から素直な言葉を奪い、大事にすべき個性を自らの手で潰させている真犯人ではないだろうか。

「個性」とは特別な才能のことではない。自分は何が好きで、何を大切にして生きていくか。そうした日々の小さな選択の積み重ねがその人だけの個性になる。時には自分の「好き」や「個性」が理解されないことがあると思う。それでも私は伝えたい。他人の真似で一時的な安心感を得るよりも、少し周りと違っていいから自分という「個性」を失わないでほしい、ありのままの自分を殺さないでほしい。なりたい自分になるまで何回でも壊して新しく。胸を張って「これが私だ」そう言えた時、きっと輝けるはず。あなたらしく。